

都市空間とモノを使いこなした生活に関する研究

一路上生活者を事例として一



Keywords

ホームレス ブルーシートハウス 都市空間
路上生活 モノ 都市の飼いならし

K09072 友廣 拓馬

1. はじめに

1.1 研究背景

路上生活者、いわゆるホームレスの人たちは都市にある多くのモノを使って毎日の生活をおくっている。同じ都市空間におり、同じモノを見てはいるものの、我々が見ている空間やモノと、ホームレスの人たちが見ている空間やモノの捉え方は違うと考える。

私たちとホームレスのあいだのもっとも大きな違いは、住む場所を持っているか否かである。家がある環境と家がない環境で、都市空間や都市にあるモノの捉え方が大きく変わってくる。住む場所を失えば住む場所をつくるために、あらゆるものを駆使していかなければならない。この住む家があるか、ないかの違いがホームレス独特の空間やモノの捉え方につながり、彼らの生活に大きく関係してきているのではないだろうか。

1.2 研究目的

本研究ではホームレスに密着し、ホームレス視点での都市空間や居住空間を明らかにする。様々な理由で家を失い、職を失った彼らが、生きていくために培った知識や方法は数多くあるはずである。実際にホームレスの人たちと会話をし、彼らの生活を肌で実感することで、今までとは違った視点から都市を見ることができるようになると考える。インタビューなどを通して、そんなホームレスの視点からの都市空間の見え方、モノを再利用し生きていくホームレスの生活、都市空間での暮らし方を明らかにしていく。

1.3 研究方法

本研究は、8月～11月の間に、隅田川沿いでおこなったフィールドワークにもとづく。4軒のブルーシートハウスの実測と、その家主と周囲に住む人たちにインタビューを行った。

インタビュー項目は住人の基本情報やブルーシートハウスの詳細、1日のスケジュール等である。ブルーシートハウスは平面図、立面図、配置図で示す。

	年齢	性別	ブルーシートハウスの築年数	工費	特徴
Uさん	60代	男	4年6ヶ月	0円	発電機を持っている
Kさん	50代	男	5年	0円	猫を飼っている
Eさん	50代	男	4年	0円	銭湯を利用する
Dさん	60代	男	5年	0円	ダンボール1枚での生活

図1 インタビュー内容の抜粋

2. 調査地・ホームレスの概要

2.1 調査地の概要

今回調査を行ったのは、南千住駅南口から南に向かった先にある明治通りを東に進み、白鬚橋を渡ってすぐの隅田川沿岸部である。

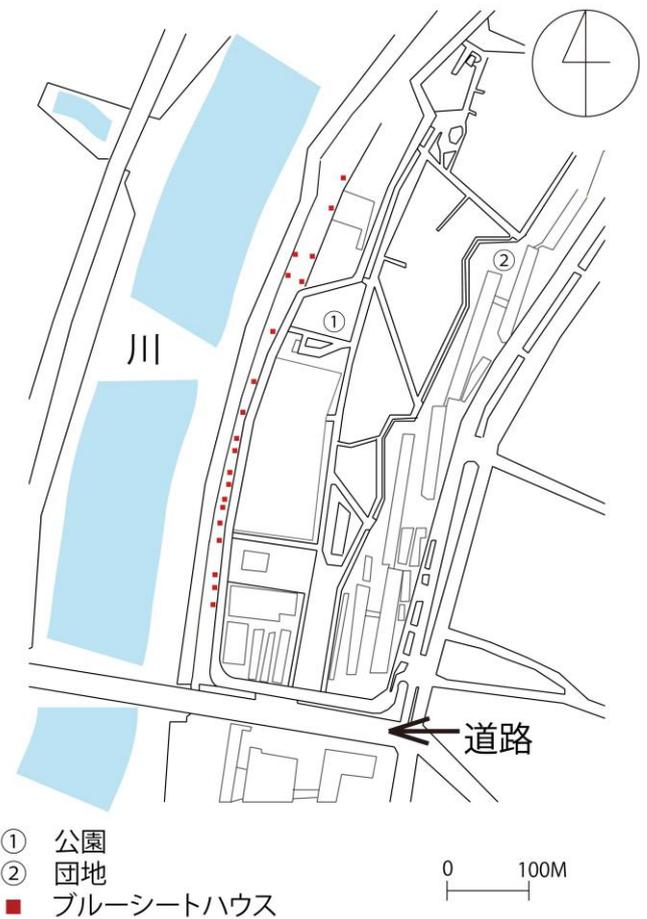


図2 調査地

ここには多くのブルーシートハウスが建ち並んでおり、ホームレスの人たちが生活の拠点としている。真上には高速道路があり、その下の日陰にブルーシートハウスが多く建てられている。通行人は少なく、この近辺に住んでいるホームレスの人たちが通り道として使っていることがほとんどである。

2.2 ホームレスの概要

(1) 現状

2012年1月の厚生労働省の調べによると、東京23区のホームレスの人数は2134人である。日本全体では9576人となっている。バブル崩壊後の不況下でその数は増し、2003年1月～2月の厚生労働省の調べでは全国で25,296人に達していた。現在は全国で9576人と減少傾向にあるが、そのほとんどが東京都、大阪府、政令指定都市など都市部に多いことがわかっている。

また厚生労働省ではホームレスの定義を「失業、家庭崩壊、社会生活からの逃避など様々な要因により、特定の住居を持たずに、道路、公園、河川敷、駅舎等で野宿生活を送っている人々」としている。

(2) ワーキングプア

上記のホームレスの定義に似たものに「ハウジングプア」という考え方がある。

ハウジングプアの定義は「貧困ゆえに住居権が侵害されやすい環境で起居せざるを得ない状態」のことである。さらにハウジングプアは「屋根のない状態」、「屋根はあるが家がない状態」、「家はあるが住居権が侵害されやすい状態」の3つの状態に分けられる。このなかで「屋根のない状態」にホームレスは当てはまる。

(3) 自立支援施策

東京都では「緊急一時保護センター」から「自立支援センター」へと至る「ステップアップ方式」のシステムを主軸にホームレスの自立をバックアップしている。緊急一時保護センターで宿泊をしながら「心身の健康回復」を図り、自立支援センターで本格的な求職活動が開始される。この自立支援施策は2001年12月に東京都と東京23区の「路上生活者自立支援事業」の一環として始まった。以後、場所を5年毎に移しながら行われている。緊急一時保護センター、自立支援センターともに東京都内に5箇所設置されている。

3. ブルーシートハウスの特徴

3.1 特徴

ブルーシートハウスは自分だけの空間を確保するとともに雨や風をしのぎ、荷物の保管もできる。しかし、水、電気、ガスは通っておらず、キッチンやトイレ、風呂ももちろんのこと備わっていない。壁も多くの場合、ベニヤ板一枚なので、暑さや寒さといった気候にも柔軟に対処することはできない。ブルーシートハウスは必要最低限の空間を確保するために作られている。そこで最も優先されるのが安全に睡眠をとれるということである。路上での生活ではいたずらをされる危険性が高く、時に命の危険にまで及ぶ。路上生活を強られるホームレスにとって、寝る場所の確保は重要であり、そのためブルーシートハウスを作ることは必要なのである。

3.2 材料

ブルーシートハウスで使われている材料は、角材、ベニヤ板、釘、ブルーシートがほとんどである。この他にも銀シートやすのこ、ダンボールなども使い各々が工夫しながらブルーシートハウスを作っている。以下にこれらの材料の主な使われ方を示す。

角材：ブルーシートハウスの柱や梁などの躯体や窓のある家では窓枠に使われている。

ベニヤ板：ブルーシートハウスの壁や床板として使われている。

釘：躯体の接合に用いる。ブルーシートで建物を覆うときにも使われる。また室内では釘を壁や柱に軽く打ち込み、モノをかけられるようにするなど、狭い室内でのモノの収納のためにも使われる。

ブルーシート：建物全体を覆い、雨水が室内に入らないようにする。

銀シート：車の日除けに使われているもので、断熱材として使われている。

すのこ：床に使われている。すのこの上にベニヤ板を乗せることで床を地面から離している。

3.3 作り方の工夫

Uさんのブルーシートハウスの例をあげる。Uさんは施工期間の短縮をはかるために幅900mmの自立するパネルを用いている。このパネルと柱を一体化することで壁と柱を分離せずに済み、作業時間の短縮につながる。パネル自身が自立しているため、組み立てる際に倒れないように何かで固定する必要がないことも、作業時間の短縮につながっている。



写真1 ブルーシートハウスの構造 (Uさんの事例)

3.4 ブルーシートハウスの詳細

Uさんのブルーシートハウスの例をあげる。Uさんのブルーシートハウスは他の3人、さらには調査地のブルーシートハウスの中でもサイズが大きい。寝室は6畳ほどの大きさがあり、さらに別に3畳ほどの物置場が設置されている。倉庫には拾ってきたアルミ缶が収納されている。寝室は手作りの台をうまく活用し空間に無駄がないように収納をしている。鍋やフライパン、やかんなどの調理道具、TVや扇風機などの家電もUさんのブルーシートハウ

ス内だけで見る事ができた特徴的なモノである。

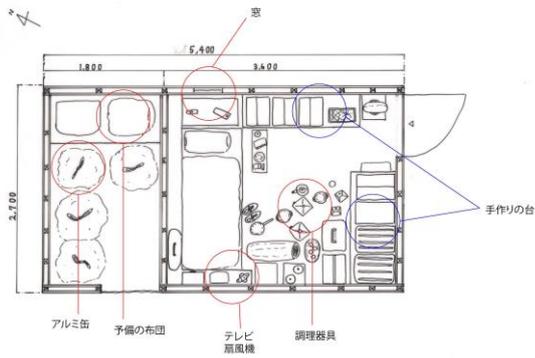


図3 Uさんのブルーシートハウスの室内

4. ホームレスの生活

4.1 1日のスケジュール

ホームレスの人々は、ブルーシートハウスを拠点として、どのような日常を暮しているのだろうか。Kさんの例をあげる。

起床は6時30分頃である。朝起きてまず公園に行き水をペットボトルに溜める。この水を飲み水として活用している。

7時30分頃から「庭」の水やりを開始する。Kさんは家の入口の前に植物を育てており、室内に砂埃が入るのを防止している。そのため植物を枯らさないようにするための水やりは、毎日の日課となっている。

8時過ぎには朝食を買いにコンビニに出かける。ここで自分とペットの猫の朝食を購入する。Kさんは猫を5匹飼っており、猫の世話も毎日の日課である。

朝食を終え、9時に日雇いの仕事に出かける。仕事を終え帰ってくるのが18時30分頃である。それから夕飯を食べ、猫と遊んだり、周りのホームレスの人と会話をしたりする。

眠りにつけるのは0時を過ぎてからだという。Kさんはイタズラをされた経験がトラウマとなり、人の声がするうちは眠れないという。

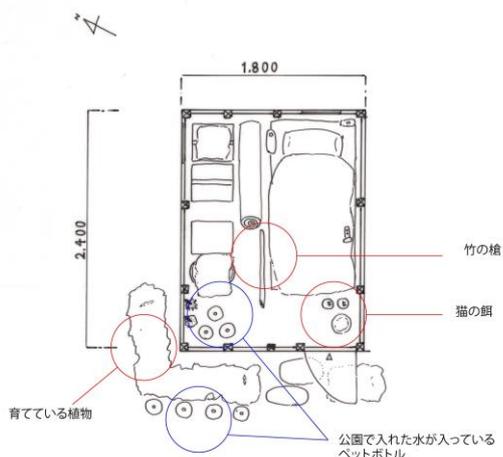


図4 Kさんのブルーシートハウスの室内

4.3 炊き出し

東京都では多くの場所でNPO法人が炊き出しを行い、ホームレスの援助をしている。教会でも炊き出しを行っていることもある。

調査に協力をしていただいたDさんに、これまでに行ったことのある炊き出しについて教えてもらった。

調査地の白鬚橋では現在、木曜日と土曜日に炊き出しが行われている。そのほかに玉姫公園では火曜日と日曜日、堀公園では火曜日、隅田公園では日曜日、言問橋では水曜日と日曜日に炊き出しが行われている。調査地から一番遠い場所にある言問橋まで約2kmである。2kmほど歩けば1週間のうちの4日間は確実に1回は食事をとることができる。

Dさんは現在、ある程度の収入があるため白鬚橋での炊き出しのみ利用しているという。いっぽう、Uさんに関しては炊き出しは利用していない。いつまでも炊き出しに頼らず、収入があれば自力で生活をしていくことが今回の調査に協力してくれたホームレスの傾向である。しかし、ホームレスになったばかりでまともに食事ができない際には、各地の炊き出しを活用することで生活をすることも可能である。

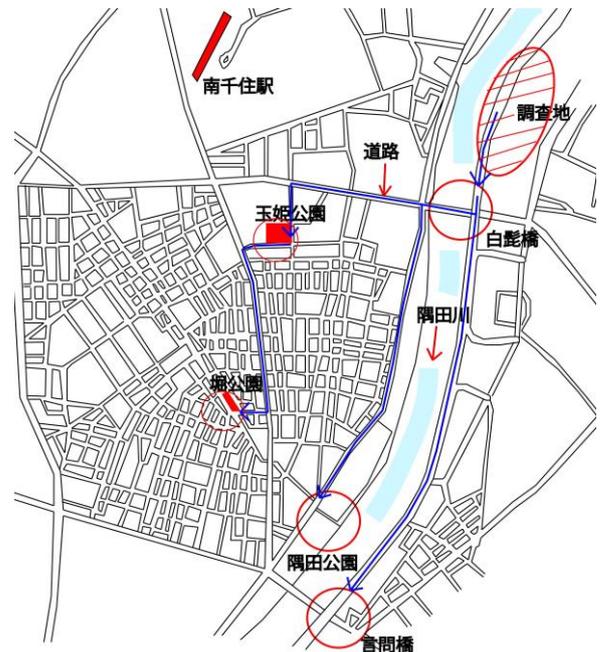


図5 炊き出しの場所

4.2 行動範囲

ここでは、ホームレスの都市空間での行動範囲の一例を示す。図はUさんの例である。公園では飲み水の確保やトイレの利用をしている。コンビニでは朝食や夕食を買うために訪れる。2日に1度は銭湯を訪れて体をきれいにし、疲れをとる。銭湯にあるコインランドリーでは洗濯も行う。生活費の一部となるアルミ缶集めは朝か夜に行う。夜は人目につきにくいというメリットもある。

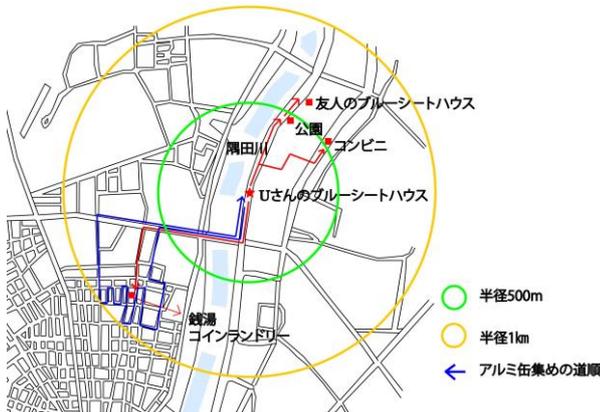


図6 行動範囲

5. ホームレスどうしの繋がり

5.1 周りの人たちとの関係

調査地ではホームレスどうしの関係が非常に良好である。もちろん一人だけでひっそりと暮らしている人もいるが、多くの人が他のホームレスたちと仲良く暮らしている。路上生活をしていくうえで助け合っていくことは重要である。ブルーシートハウスの取り壊しの際には、一人で行くと怪我をする危険性が高い。そのため互いに手伝いあって作業を行う人が多い。

5.2 交流場所

日中や夕方、夜には、多くの人がブルーシートハウスの前の段差や私物の椅子に座って話している。ガスコンロを使って料理を作り、外にシートを広げて一緒に食事をしている人もいる。

Uさんは友人と一緒に食事をすることがある。室内で調理するのは火事になる恐れがあるため調理は外で行う。外で調理を行う際には木材で作られたコの字型の風よけを用いて風で火が消えないように工夫してある。室内にある余った銀シートを外に広げることで食事スペースを確保する。食材はクーラーボックスの中に保存をしている。夏の日中のブルーシートハウスの室温は非常に高く、食材もすぐに傷んでしまう。そのためクーラーボックスに入れておくことである程度食材を長持ちさせることができる。

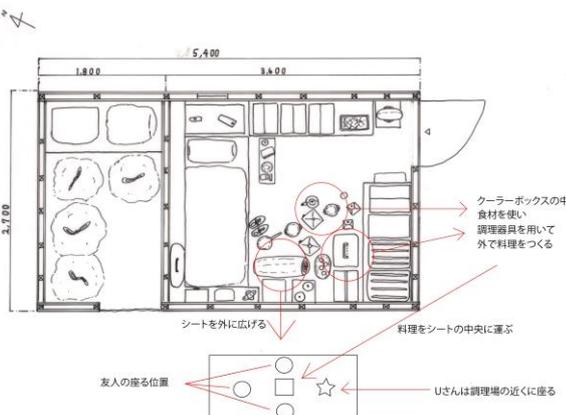


図7 食事方法

6. 考察

ホームレスは路上生活という過酷な状況の中で、知恵を絞り、助け合いながら生活を送っている。公園の水を飲み水とし、ゴミ捨て場のアルミ缶を拾い生計を立てる。ホームレスが集まる場は非常ににぎやかで、周りとうまくコミュニケーションをとりあっている。

ホームレスの都市空間での行為を私たちが行うことはない。それは、都市空間で生きる人の一般的な行為ではないからである。しかし、ホームレスはむしろ一般的ではないことに注目している。路上生活におちいったホームレスには頼れる人が誰もいない。人に頼れないならば、そこにあるモノや空間に頼っていかなければならない。公園は遊ぶ場所であったり、ゴミ捨て場はゴミを捨てる場所であるというように、都市空間の一般的な使いかたをしていては、路上で生活をしていくことは不可能である。ホームレスは都市の使い方の型にとらわれず、都市のあらゆる可能性を引き出しながら生活をしているといえる。

また路上生活という過酷な生活を知る者たちが集まると互いに助け合い生きていこうとするようになる。すれ違うたびに元気な挨拶が飛び交い、ブルーシートハウスの取り壊しなど困ったことがあれば協力し合って生活をしている。現代の都市では見られることがほとんどない協働の光景である。

7. おわりに

ホームレスの生活や行為は、多くの人には理解しがたいものである。ホームレスのように型破りなことをしなくても人々は都市で生きていくことができる。しかし、それにより都市の在り方を決めつけ、狭い視野でしか都市を見なくなっているのではないだろうか。

ホームレスのように、普段は意識しないような空間やモノにも意識を向ける必要がある。今までは見向きもしなかったことに目を向けることで、都市の新たな見え方や可能性が広がってくる。

参考文献

- 1) 長嶋千聡 『ダンボールハウス』
- 2) 坂口恭平 『0円ハウス』
- 3) 坂口恭平 『TOKYO 0円ハウス 0円生活』
- 4) 坂口恭平 『ゼロから始める都市型狩猟採集生活』
- 5) 稲葉剛 『ハウジングブア』
- 6) イアン・ボーデン 『スケートボーディング、空間、都市 身体と建築』
- 7) 関根康正 『〈都市的なるもの〉の現在 文化人類学的考察』
- 8) 松田素二 『抵抗する都市』
- 9) ケヴィン・リンチ 『都市のイメージ』